

肢体不自由支援学校での マルチメディアDAISY図書を活用

都立墨東特別支援学校
河野 聡美

はじめに

本校は、肢体不自由のある小学生から高校生までが在籍する特別支援学校です。児童・生徒の発達段階や実態の幅も広く、医療的ケアの必要な子どもたちも多く在籍しています。

今年度より、タブレット端末（iPad 2台）を活用したマルチメディアDAISY図書を導入しました。貸出期間や貸出ルールを決めて、少しでも多くの子どもたちが利用できるように工夫しています。

本校では昨年から、わいわい文庫をパソコンでは活用できるようになっていましたが、どのようなものなのか、また、活用方法がわからない教職員が多く、利用する子どもたちもそれほど多くはありませんでした。

しかし、タブレット端末を使っている様子を目にすることで、「これなら〇〇さんにも活用できるかも！」と活

用する教職員も次第に増えてきました。

教科学習における読書活動としての活用はもちろんのこと、最近では、社会見学や文化祭などの事前・事後学習などにも活用されるようになりました。

活用実態と様子や効果

(1) 集団での活用例

給食前後の身体を休める時間での活用

知的代替の学習グループ（小学部高学年）は、給食前の配膳を待つ時間や、昼休みを図書室で過ごしています。年度当初は、給食を食べる教室の隣が、たまたま図書室だということで、のんびりと待機していたのですが、図書室に常設してあるノートパソコンの中に入っているマルチメディアDAISYを使ってみよう！ ということで利用をはじめました。

お話を聞くことが大好きな子どもたちだったので、2～3回使ってみると夢中で見るようになりました。しかし、

ノートパソコンの画面は、複数の子どもたちが一緒に見るには小さすぎたので、テレビとパソコンをつないで楽しむようになりました。



写真1

①子ども同士、子どもと大人とのかかわり

導入当初は、教職員が子どもたちの興味や発達段階に合わせてタイトルを選んで、子どもがそれを見るという流れでした。一通りのタイトルを見ていくと、次第に、「こぐまちゃん!」「ねこ〜!(11ぴきのねこ)」「でんしゃ〜!(しんかんせんの図鑑)」「コックモーモー!」と子どもたちからリクエストが出てくるようになりました。友達と意見がぶつかると、順番を決めて見たり、譲ったり、自分の意見をどうにかして通したりと、子ども同士でのやり取りも見られるようになってきました。

さらに、何回も同じお話を読んでいくうちに、お話をすっかり覚えて、マルチメディアDAISYの読み上げに合わせて一緒に声を出して読むことも多くなってきました。また、興味のある場

面などでは、テレビの画面に近づいていき、画面に触れて「〇〇だよ〜」と友達に教えることもよくありました。

1か月もたつと、マルチメディアDAISYで読んだタイトルと同じ本を図書室の本棚から探して、「よんで〜」と教職員のところに持って来たり、自分で実際に本をめくって読んだり、マルチメディアDAISYをきっかけにして本への興味が広がった子どももいました。▶写真2・3



写真2

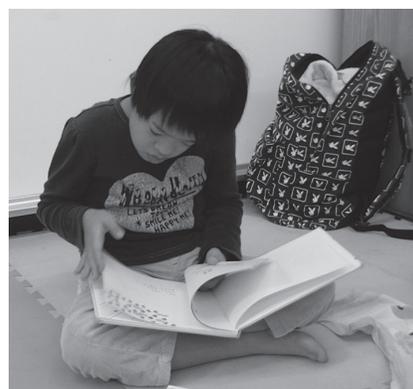


写真3

本を読んでもらうという経験から、一緒に本を読む、本を自分なりに楽しむ、というように子どもたちが成長していく様子を間近に感じ、本の持つ力

に驚かされました。

②マルチメディアDAISYを楽しむ姿勢

マルチメディアDAISYを楽しむ姿勢は、車いすに乗って、椅子に座って、フロアに座って、フロアの上で横になってなど、子どもたちの実態に合わせることができるところが魅力です。身体がきつく、画面を見る姿勢をとることができなくても、読み上げの音声によって耳で楽しむこともできます。その時々で子どもにとって楽な姿勢でリラックスしながら本を楽しむことができました。



写真4

③給食に与えた影響

マルチメディアDAISYの活用を始める以前は、給食の前後の教室移動や日常生活指導などがあるために、子どもは落ち着くことがむずかしい様子が見られました。筋緊張が強い子どもは給食後に嘔吐してしまうことがとても多くありました。しかし、給食の前にマルチメディアDAISYで読書を楽しむことで、気持ちを落ち着けてから給食に臨むことができるようになりました。

さらに、給食後にも、読書でリラックスして身体を休めてから学習教室に移動できるようになりました。筋緊張による嘔吐の回数も少しずつですが減少してきました。

読書活動には、気持ちを切り替える効果や、気持ちを落ち着けて給食や午後の学習に取り組める効果がありました。

(2)個別での活用例

①立位の姿勢の学習の場面での活用

Aさんはもともと本を読むことが好きな子どもです。また、体幹を鍛えるためや身体の拘縮や変形を防ぐために、立位台に立つ学習を行っています。特に電車が大好きなのでいつも立位台に立って、天板の上に開いた電車の図鑑を置いて読んでいました。

しかし、Aさんは天板の上に置いた本を読もうとすると、頭部が前に倒れ過ぎてしまったり、天板に何も無い時には頭部が後ろに反り返ってしまったりすることが多くありました。▶写真5

そこで、伊藤忠記念財団から貸与されたタブレット端末(iPad)とiPadアームを活用し、タブレット端末を立位台に固定して、好きな電車の図鑑の読書ができるようにしました。Aさんが頭部を上げた姿勢で画面を見れるように、タブレット端末の位置を調節すると、頭部の不安定な動きが減り、正し

い姿勢で立位台に立てるようになってきました。▶写真6

Aさんにとっては、好きな電車の図鑑が見やすくなり、教職員に姿勢のことばかり指摘されることもなくなり、楽しみながら立位の学習に取り組めるようになりました。

また、紙の本では、ページをめくることがむずかしく、同じページばかりだったのが、マルチメディアDAISYを活用することにより、自動でページがめくることができるので、本の楽しさをより感じるようです。立位の姿勢での学習が終わる時間になっても、「いや～！でんしゃ（読む）！」と言ってすんなりと終わらせてくれません。

好きな本を読みたいという気持ちが、視線の位置を定めて、姿勢の向上につながったようです。楽しみながら、意欲的に学習に取り組むきっかけとして、マルチメディアDAISYを活用できたと感じます。



写真5



写真6

②フロアで仰臥位になった場面での活用

体幹がしっかりしていないため、側臥位をとり続けることがむずかしいAさんや、身体の筋緊張が強く側臥位をとることがむずかしいBさんが、フロアの上で仰臥位でもマルチメディアDAISYを楽しむことができたらいなと思っていました。

ここでも活躍をしたのが、タブレット端末とiPadアームです。このような子どもが仰臥位でも見るができるようにタブレット端末をiPadアームで固定して使用しました。本人が一番リラックスできる姿勢で読書を楽しむことができるようになりました。

フロアの上に仰臥位でマルチメディアDAISYを楽しんでいる子どもがいると、寄ってきて画面をのぞきこんだり、一緒にフロアに寝転がって楽しんだりする子どももいます。友達と何のタイトルを読むか話したり、一緒に笑ったりしながらマルチメディアDAISYを楽しむ様子が見られました。

▶写真7・8

子ども一人一人の姿勢に合わせてタブレット端末を活用しましたが、一人で楽しむだけでなく、複数の子どもたちで楽しむこともできるのだなと気づかされました。楽しい本の周りに子どもが集まってくるのは、マルチメディアDAISYでも同じなのだなと感心しました。



写真7



写真8

おわりに

読書のもつ意味は、単に本を読むことだけではありません。本を読むことで気持ちを落ち着かせたり、高めたりすることができます。また、一人で楽しむことも、誰かと一緒にわいわい楽

しむこともできます。そこから会話が生まれ、社会性が身につくことにもつながっていきます。障害などで読書をするのがむずかしい子どもたちにとって、マルチメディアDAISYなどの電子書籍は読書とかかわりをもてるツールとして、とても有効なものです。誰かに本を読んでもらうこともとても大切な経験ですが、いつでも本を読んでもらうということは無理です。本が読みたいなと思った時に気軽に読書が楽しめ、本を読むことでいろいろな発見をする楽しさを子どもたちに経験してほしいと思います。

本校には、聴覚障害や視覚障害をあわせ有する子どもたちも多く在籍しています。さまざまな障害種に合わせて設定が変更されたり、障害種に合わせたマルチメディアDAISYがあったりしたらいいのになという声が多く聞かれました。このような実際の現場の声を少しでも取り入れていただき、よりマルチメディアDAISYの活用の幅が広がっていくことを期待しています。